はじめに

本講義は「現代文が全くできない」「現代文の勉強の仕方がわからない」という人が基礎からはじめて、難関私大合格レベルに達する講座です。最初は簡単に思える問題もありますが、基礎を徹底することによって難しい問題も解けるようになるということを示していきますので、決して手を抜かないでください。また、後半は難しい問題が増えてくると思いますが、予習の段階で解けなくても講義後には必ず解けるようになりますから、しっかりと解説を聞いてください。

五日間でみなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題は「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

①　文法
②　構文
③　論理

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ講義を受けるだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして解答してください。

夏期講習では「制限時間なし」でよいのですべての問題に解答して下さい。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。できれば、「その部分を解答の根拠とした理由」をメモ欄に書いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　問題を解く。解答の根拠をメモしておく。

Ⅱ　講義について

受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答をする」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。ただし、本文に線を引く作業は講義中に行ってください。

講義ポイント

講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント　**ポイントを覚える。問題を解き直す。**

難関私立大　現代文　目次

第一講　「差異」と「類似」を読む……p.8
第二講　「論証」を読む……p.30
第三講　「心情」を読む……p.52
第四講　「様々な設問」を解く……p.76
第五講　「分析」から「総合」へ……p.90

第一講 「差異」と「類似」を読む

「否定（でない）」について

「否定」とは対立する概念「補集合」を作り出す言葉です。否定の前後には「対義語」または「対立する内容」がくるということを確認しましょう。

この否定は、「空所補充問題」や「傍線部説明問題」などを中心にどの設問にもからむ可能性のあるもので、論理的読解の一番の基礎になるものです。正確に分析できるようになって下さい。

「否定」のフレームワーク

① A ではなく B である。
② A よりむしろ B。
③ A のようで実は B。

「差異」のフレームワーク

① Ａ は Ｘ であるのに対し、 Ｂ は Ｙ（Ｘでない） である。
② Ａ は Ｘ であるのとは異なり（とは違って）、 Ｂ は Ｙ（Ｘでない） である。
③ Ａ は Ｘ であるのとは別に（とは逆に）、 Ｂ は Ｙ（Ｘでない） である。

※ 二者（ＡとＢ）の違いを説明するフレームワーク。

「類似」のフレームワーク

① A は X である。
　また（同様に、それと似て）
　B も X である。
② A と B は ともに X である。
③ A と同様に B も（また） X である。
④ A と B は X という点で同じである。

※「類似」のフレームワークとは、何か（A）と何か（B）の共通点について述べる時に使われるフレームワークです。
※「も」という副助詞や、「また」という副詞に注意すると類似は見つけやすくなります。
※類似を使った比喩を「類比」と言います。
※類似は「アナロジー」「類推」という言い方もあります。

傍線部内容説明問題

「傍線部内容説明問題」とは現代文において、最もオーソドックスな設問です。そしてこれから始まる「各設問別解法」の土台となる「解法」なので、しっかりとマスターしましょう。

その設問形式は次の通り、

傍線部～とあるが、どういうことか　説明せよ。
or
どういう意味か

というものです。この問題に対して常に一定のフォームでアプローチするように心がけましょう。それが「設問解法」であり、現代文で常に高得点をとるための王道です。

では、どのようにアプローチするかというと、次の通り、

傍線部説明問題解法

―「どういうことか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
・指示語
・比喩表現
・個人言語

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

※① 「文構造」の分析について

★ 文法的構造

・主語（主部）―述語（述部）
・修飾語（修飾部）―被修飾語（被修飾部）や目的語（目的格）や補語（補格）など
・接続助詞や連用中止法
・倒置や省略

★ 論理的構造

・否定　・差異（変化）
・連言　・類似（アナロジー）
・選言　・逆説
・条件法　・因果

※②「ポイント」になる語句について

★指示語（代名詞）

(指)これ、この、このような、このように、それ、その、そのような、そのように　など

(代)前者、後者、両者、右の、彼　など

★比喩表現　＝　直喩、暗喩、メタファー、レトリック　など

★個人言語　＝　筆者が一般的な意味とは異なる特殊な意味で使っている言葉、学術（専門）用語

※③「解答の根拠」となる部分との対応について

★同値関係

★対立関係

★因果関係

★包摂関係（抽象と具体の関係）

以上の関係がある部分と対応させます。

このような関係で対応した部分が、解答する際の「解答の根拠」となります。

（次ページより問題演習）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

(ア)われわれが世界を表象する仕方には、知覚と思考のふたつの異なる様式があるように思われる。トマトが赤いことを知覚的に表象する場合には、まさに(あ)ガンゼンにその有様が立ち現れるのにたいし、思考的に表象するさいには、ただトマトが赤いと思うのみである。たとえそう思うときに、その有様がイメージとして浮かんだとしても、この想像が思考ではない。思考はあくまでもそれに伴って生じる想像とは別の心的状態である。

知覚と思考がその表象様式を異にするとすれば、その違いはどのようなものであろうか。それとも、知覚と思考のあいだには、じつは表象様式の違いはないのだろうか。知覚も思考の一種である、もしくは思考も知覚の一種なのだろうか。知覚と思考の関係をめぐるこのような哲学的問題は、伝統的には脳の話とは無関係に論じられてきた。しかし最近の脳科学の知見は、この種の哲学的問題にたいしても重要な(い)シサを与えてくれる。以下では、知覚と思考の表象様式の違いについて、脳科学の成果を多少なりとも織り交ぜながらコウ(う)サツしたいと思う。

思考は概念的であるのにたいし、知覚は非概念的であるといわれること

がある【Peacocke 1992】。トマトが赤いと考えるとき、われわれは〈トマト〉と〈赤い〉の二つの概念を㋓コウシし、それらを組み合わせて、トマトが赤いという表象を形成する。このように思考の表象は複数の概念の組み合わせという構造をもつ。

　ところで、概念のもっとも重要な特徴は何であろうか。それはおそらくその一般性ないし㋑文脈独立性であろう。〈トマト〉という同じ概念が、赤いトマトだけではなく、緑のトマトや輪切りにしたトマトなど、さまざまな文脈にあるトマトに適用できる。それゆえ、われわれは〈トマト〉という同一の概念を他のさまざまな概念と組み合わせて、トマトが緑だとか、トマトが輪切りにされているとか、いろいろな思考を形成できる。われわれが無数に多くの思考を形成できる（思考の「生産性」とよばれる）のも、思考が文脈独立的な概念の自由な組み合わせによって形成されるからである。

　これにたいして、知覚を非概念的とする見解によれば、トマトが赤いのを見るとき、そこに見えるトマトと赤さは互いに一体となって表象されており、全体の光景から切り離せるような文脈独立的な要素ではない。知覚においては、事物は概念的に表象されているのではなく、文脈依存的ないし相互浸透的に表象されているのである。

　このように知覚を非概念的とする見解にたいして、知覚が思考の理由となりうる以上、知覚は思考と同じく概念的でなければならないとする見方もある【McDowell　1994】。われわれはトマトが赤いのを見て、それを理由にして、トマトが赤いと考える。知覚と思考のあいだに理由関係が成り立つためには、知覚は概念的でなければならない。なぜなら、概念的な表象のあいだでしか理由関係は成立しないからである。この見解によれば、知覚と思考の違いは、知覚が外界からのセイ(オ)ヤクを直接受けるという点にのみあることになる。

　知覚が概念的かどうかの問題にたいして、最近の脳科学のある知見が非常にシサに富む。この知見によれば、ある状況が知覚されるとき、その状況に備わる諸特徴はそれぞれ脳の別の部位で表象される。たとえば、トマトを見るとき、その色を表象する部位と形を表象する部位は異なる。このように異なる部位で表象される諸特徴が何らかの仕方で結合されることによって、ひとつのまとまった知覚風景が構成されるのである。

　(ウ)状況の異なる特徴が脳の異なる部位で表象されるとすれば、知覚もまた概念的であるようにみえる【Barsalou　1999】。赤いトマトを見るとき、トマトと赤さが脳の別の部位で表象されるということは、それらが相互浸

透せずに文脈独立的な要素として同定されることにほかならないように思われる。じっさい、赤いトマトも、緑のトマトも、ともにトマトにみえる。トマトはどのような文脈にあっても等しくトマトとして知覚的に表象されるのではなかろうか。

　知覚が概念的であることは、知覚的な要素を組み合わせることによって、それまで一度も知覚したことのない物事を自由に想像できることからもうかがえる。じっさい、最近の脳科学の知見によれば、想像は知覚と同じ脳の能力によると考えられる。赤いトマトを想像するときに活性化する脳の部位は、それを知覚するときの部位と同じである。想像はようするに外界からの刺激によらない「知覚」である。われわれは知覚したことのないことがらを想像できるが、想像可能なことがらは適切な刺激さえ与えられれば知覚可能である。想像能力の限界と知覚能力の限界は一致する。したがって、想像が概念的であるなら、知覚もそうである。

　たしかに、知覚の内容を構成する要素がある程度の文脈独立性をもつことは認めなければならないだろう。しかし問題は、それが思考の内容を構成する概念的な要素と同じくらい文脈独立的かどうかということである。もし同じくらい独立的なら、知覚は思考と同程度にその要素の自由な組み換えが可能であろう。しかし、この点で知覚は思考に及ばないように思わ

れる。

たとえば、イヌが走ることと、ネコが眠ることを思考的に表象できる人は、イヌが眠ることも、ネコが走ることも思考的に表象できる。しかし知覚については、必ずしもそうはいえないように思われる。たとえば、イヌが走る場面やネコが眠る場面には何度も(か)ソウグウしたが、イヌが眠る場面やネコが走る場面には一度もソウグウしたことがない人は、イヌが走るのやネコが眠るのを知覚的に表象できるが、イヌが眠る場面はただある塊が横たわっているとしか知覚できないかもしれない。

知覚的に表象される諸特徴が脳の異なる部位で表象されるとしても、それらは思考的に表象される諸特徴ほど自由に組み合わせが可能なわけではない。知覚的に表象される特徴はそれが(き)チュウシュツされた元の諸文脈の「名残」をいくばくかとどめている。思考が概念的であるのにたいし、(エ)知覚はそうではない。両者はその表象の様式が異なるのである。

ところで、最近の脳科学の成果によれば、脳における表象様式は知覚的なものだけであるように思われる【Barsalou 1999】。脳には、知覚的な表象をそうでない様式の表象に変換する過程は見いだされない。そうだとすれば、思考が知覚とは異なる表象様式をもつとすると、思考を脳のなかに

位置づけることはできなくなる。トマトが赤いという思考は、そのことを表す脳のある部位の活性化状態ではないことになる。しかしそれでは、いったい思考はどこに存在することになるのだろうか。

ここで注目すべきは、思考の内容が文の内容とピッタリ一致することである。トマトが赤いという思考は「トマトが赤い」という文とまったく同じ内容をもつ。両者はともに概念的である。そうだとすれば、じつは、トマトが赤いと考えることは「トマトが赤い」という文を発することにほかならないのではなかろうか。そのような文を発することは、頭のなかにある思考を言語的に表出したものと考えられがちである。しかし、脳のなかに思考が存在しないとすれば、文を発することがじつは思考そのものにほかならないのではなかろうか**【信原 2000】**。

たしかにわれわれは、たとえば「地球はまるい」という文を発さなくても、地球はまるいと考えているように思われる。しかしそれは、われわれの脳のなかにそのような思考を産み出す能力があるということであって、思考がそのまま脳のなかに存在するということではない。われわれは、脳によって「地球がまるい」という文が産み出されることから、その文と同じ概念的構造をもつ思考が脳のなかにあると考えてしまいがちである。しかしそれは、脳科学の知見からすれば、誤りだと思われるのである。

常識に反して、脳科学の知見からすれば、むしろ概念的な思考は発話ないし内語として脳の外に存在すると考えられる。非概念的な知覚は脳のなかにニューロンの活性化として存在するが、Ⓐ思考は概念的である以上、脳のなかには存在しえないのである。

（信原幸弘『脳と哲学』）

注　【　】内の注記は、筆者が参照した論文の著者名と発表年次である。

問一　二重傍線部ⓐ「ガンゼン」、ⓘ「シサ」を正しい常用漢字に改めよ。

問二　傍線部㋐の立場に立った場合、どのようなことがいえるか。最も適当なものを次のａ～ｅから一つ選び、その記号を答えよ。

ａ　トマトの赤さを思考的に表象すると同時にその有様をイメージする場合は、知覚と思考は同一の表象様式であることになる。

ｂ　トマトが赤いと思う時にそのトマトの赤い有様が想像されても、それは思考的な表象とはいえない。

ｃ　一人の人間が得た知見は後世まで継承できるので、人類には知覚と思考の二種類の表象様式が生まれた。

ｄ　トマトの赤さを知覚的に表象することは、それを想像することを意味する。

ｅ　知覚と思考の二つの表象様式があるが、知覚的な表象を思考的な表象に変換する過程が脳にある。

問三　傍線部㋑はどのような意味で用いられているか。最も適当なものを次のａ～ｅから一つ選び、その記号を答えよ。

ａ　各概念の組み合わせが自由であること。

ｂ　各概念の組み合わせが副次的であること。

ｃ　各概念の組み合わせが特殊性を有すること。

ｄ　各概念の組み合わせが普遍性を有すること。

ｅ　各概念の組み合わせが限定的であること。

問四　傍線部㋒はどのようなことをいったものか。最も適当なものを次のａ～ｅから一つ選び、その記号を答えよ。

ａ　脳の異なる部位で表象されることは、知覚が相互浸透する必要があるので、概念的だといえる。

ｂ　状況の異なる特徴が表象される脳は状況によって著しく変化を来す構造を有するから、それによって知覚されたものは概念的だといえる。

ｃ　トマトと赤さが脳の別の部位で表象されるということは、それが脳内において相互浸透することであり、したがって知覚は概念的だということになる。

ｄ　トマトが赤いという外界からの刺激は、思考の場合とは脳の別の部位で受け止めたものであるから、知覚は思考とは別の働きをすることになる。

ｅ　トマトと赤さが脳の別の部位で表象されるとすると、それは文脈独立的であることになり、知覚も概念的であるといえる。

問五　傍線部㋓はどのようなことをいったものか。最も適当なものを次のａ～ｅから一つ選び、その記号を答えよ。

ａ　知覚は、思考という行為を経ることによって概念化されることはない。

ｂ　知覚は、文脈からの独立性の有無だけでは判断することができないから、非概念的であるといえる。

ｃ　知覚は、思考ほどにはその内容の構成要素を自由に組みかえられないので概念的であるとはいえない。

ｄ　知覚は、その文脈を構成する要素が脳外に存在するから、概念的であるとはいえない。

ｅ　知覚は、思考と違って、外的な刺激によってのみ喚起されるので、概念的であるとはいえない。

問六　二重傍線部㋒㋓㋔㋕㋖のカタカナと同じ漢字を用いる語を、次のa〜eから一つずつ選び、その記号を答えよ。

㋒　コウサツ

a　政治をサッシンする。
b　ボウエキマサツが生じる。
c　映画のサツエイ現場。
d　鋭いドウサツリョクがある。
e　競売にニュウサツする。

㋓　コウシ

a　ガイコウシセツダンを派遣する。
b　勉学にシショウをきたす。
c　シャカイフクシの重要性。
d　シボウコウに合格する。
e　直立不動のシセイをとる。

㋔　セイヤク

a　外国とメイヤクを結ぶ。
b　論理がヒヤクする。
c　御リヤクを授かる。
d　ヤクビョウガミにとりつかれる。
e　重要なヤクショクにつく。

㋕　ソウグウ

a　意欲をソウシツする。
b　文化をソウシュツする。
c　書物をハクソウする。
d　海でソウナンする。
e　動物のキソウホンノウ。

ⓚ　チュウシュツ

a　貨幣をカイチュウする。
b　チュウシンからお礼を述べる。
c　チュウセキへイヤ。
d　チュウカイギョウシャ。
e　チュウショウテキな絵画。

問七　波線部Ⓐはどのようなことをいったものか。五十字以内で記せ。なお、句読点・符号も字数に含めるものとする。

（次ページより解答欄）

問一
㋐
㋑

問二

問三

問四

問五

問六
㋒
㋓
㋔
㋕
㋖

問七

解答解説

第一講 「差異」と「類似」を読む　解答

問一　ⓐ 眼前　ⓘ 示唆

問二　b

問三　a

問四　e

問五　c

問六　ⓤ d　ⓔ a　ⓞ a　ⓚ d　ⓚ e

問七

思考は文と同様に概念的であるのに対し、脳の中の表象は非概念的である知覚的なものでしかないということ。